

実現する神、服従する人

(創世記二一・一〜八)

二〇一二年一〇月一九日。一人の男が世を去った。名前は小笠原準一。死因は心筋梗塞であった。検視の後、葬祭業者が来て、手続きをしていた際、彼の名が偽名であることが判明。不審に思った業者が警察に連絡したところ、なんとこの男、あの「おい小池」、淡路父子殺人事件の容疑者小池俊一だったのだ。世間を騒がせ、多くの人が関心を持った逃走劇は被疑者死亡と言う、呆気ない結末を迎えるに至ったのである。

時に呆気ない結末といえ、今朝の個所もそうである。紆余曲折の二十五年を経ての約束の子の誕生譚。「もう少し劇的に書けばよいのに」と思うのは私だけではあるまい。だがこの個所は、特にその前半部は、只々行動の記録のオンパレード。驚くほどに素っ気ない。しかしその虚飾を排した簡潔な描写を見ていくと、そこに天地万物を造られた神と、その神に選ばれた人間の真剣勝負、真正面からのぶつかり合いを見ることが出来る。神と人とについて二つの事を考えたい。

一、約束を実現する「神」

一、二節には神がサラに介入し、彼女を妊娠させ、子どもを産ませた事が書いてあるのだが、その際に強調されていることがある。それはこの神のサラに対する介入が「約束されたとおりの」のものであり、「(神の)仰せのとおり」のものであり、更に言えばその事件が起こったのは「神がアブラハムに言われた時期」であったということである。つまり創世記の記者はこのサラの懐妊と出産と言ふ事件を徹頭徹尾神の約束の成就であると考えているということである。ご承知の通り、アブラハムとサラの二十五年の信仰生活は決して信仰から信仰、勝利から勝利のものではなかった。むしろ成功と失敗が何度も交差する「普通の」人生であつて、時には夫婦そろつて神の約束を嗤いさえもした。何と云う不信仰であろう。『神の痛みの神学』の北森嘉蔵はこの時のアブラハムの姿に「神を嗤うことに比べれば神に対して怒ったり、拒否したりするほうがまだ望みがある」というコメントを残しているが実に説得的である。彼らは神に対して不信と絶望を表明したのだ。だがそれでも主の約束は変わらない。そしていのちの主は既に死んでいたサラの胎を開き、彼らに約束の子を与えられたのである。そこに人間の入る余地はない。全くの恵みの業である。

二、命令に従う「人」

このように神の約束を成就するのは神ご自身であるが、だからといって神と人間の関係が神からの一方通行であるとするのは早計である。実際に三、四節にはアブラハムが神に対してした行動が二つ書いてある。一つは彼がその子を「イサク」と名付けたことである。「イサク」とは「彼は笑う」の意味である。アブラハムもサラもかつて枯れ木の如くなった自らを嘲り、その自分たちに子を授けると言つた神を嗤つた。それは苦しい体験であつた。しかし神はその過去を思い出させるかのようにイサクという名を与えた。だがアブラハムはそれに従つたのである。

もう一つの行動は彼がイサクに割礼を施したことである。創世記一七章にあるように、割礼は神とその民が結ぶ契約のしるしであり、文字通り肉体に傷が刻まれる儀式である。要は傷つけるのだ。アブラハムは一年前にすでにそれを経験していたのでその痛み(参・創三四・二五)を良く知つていただろう。しかし彼はその痛みをなんと目に入れても痛くない、生まれて八日目の我が子にも引き受けさせたのだ。ここにもアブラハムの神に対する従順をみる事が出来る。確かに神の約束を成就するのは神ご自身である。しかし一度神が応答を求めたとき、人は内にある様々な

感情を越えて神に従つていかねばならない。だからアブラハムの信仰とは決して単なる知的同意ではない。むしろ神のことは対する只管な信従なのだ。

* * *

こうして神の約束と人間の信従は交差した。その時に何が起つただろうか。六節にはサラが「神は私を笑われました(新改訳)」と言っているのを見る。これは確かに文法的には可能な訳だそうだが、多くの訳出では口語訳のように「神はわたしを笑わせて下さった」と使役形を用いており、こちらの方が文脈に合っている。約束の子イサクを抱いた時、サラは笑つた。嘗てのように自らを蔑み、神への不信を表明する、ブラックでニヒルな「嗤い」ではなく、九十歳の母は破顔して喜び、心から「笑つた」のである。神の約束と人の信仰が交差する瞬間、そこにあるのは喜びだ。その瞬間あらゆる絶望、不安、悲しみ、苛立ちは主の喜びと笑いに飲み込まれてしまう。これを祝福と呼びずして何と呼ぼうか。まとめてみよう。神の約束は全く神によつてのみ成就されるが、神はまた彼に従うことをその民に求められる。私たちの信仰の父アブラハムは真実な応答によつて「嗤い」を「笑い」に取り換えていただいた。友よ、あなたはどうか。